

## いわき七峰縦走

2018年12月2日(日)

渡邊国広

その日は快晴。風も無風に近く、空は薄く高い。払曉間もない湯ノ岳は、おそらく一年に一度であろう熱気に包まれていた。展望台駐車場は色とりどりのウェアとギアで染まり、廃墟然とした普段の状態からは想像もつかない異空間と化す。思えばこのイベントの存在をゼビスポの店頭で知ってからずいぶん時が経ってしまった。いずれ参加したいと思いつつも果たせず、平成30年12月2日ようやくその機会を得ることができた。

普段見れないものを見、聞けないものを聞き、触れられないものに触れたい。普段からそんな動機で山を、街を彷徨している。勝手知ったるいわきの山中、そんな思いも無くはなかった。が、半世紀あまりをこの地で過ごしながらも意外と行った事の無い場所も多いものだ。湯ノ岳に田代、水石トンネルに水石山、小玉ダムと、見知った点と点が線としてつながり、これまでとは違った角度でいわきの山々を見ることのできた山行となった。

イベントとしての規模も想像以上であり、参加者、スタッフともに、これ程多くの人々が関わるものとは思ってもよらなかった。私のような弱い登山初心者もいれば、3時間あまりでゴールしてしまうトレイルランナーの猛者達の参加もあり、小学生の子供連れもいたというのだから、実にリベラルで懐の広いイベントだ。

さらには、このイベントを主催し参加者達を陰になり日向になり支えたいわき山岳会の方々の労苦を思うと、心底頭が下がる。転げ落ちそうな傾斜地に草刈機を運び、草木を刈り払い、マーキングをし、ロープを張る。ルート工作の為に払われた時間と労力は想像するに余りあるものがある。参加者に山行を楽しんで貰う為、可能な限り安全性を確保したい。進む先に赤い小片を見つける度に、主催者側のそんな想いがひしひしと感じられた。イベント中も参加者にルートを指し示し、声をかけ、糖分や水分を手渡して励ますという心遣いは、“自己責任”という冷厳な言葉にすっかり慣らされてしまった身にはとても温かく感じられた。

とは言え、それだけで鈍りきった体が人並みに動くほど甘くはない。無事完走できたものの、31,620秒とかなり残念なタイムと相成ってしまった。なんとなく悔しい。鍛えなおし、次の機会にはもっと良いタイムを狙いたい。それもチャレンジコースで。また一つ目標が増えた。

故郷の山々をめぐる一日はとてもあたたかく、普段とはまた異なる山の姿を知る一日でもあった。今後もこのイベントが一回でも長く催され、一人でも多くの人達が参加されることを心より願うばかりだ。

# 奥久慈男体山

2019.1.13(日)

渡邊国広

快晴。昨年10月の初参戦依頼、登山教室の山行は好転が続く。余程日ごろの行いの良い御仁がいるらしい。風もさほど強くなく、季節や土地の気候を考えれば比較的気温も高い。

淡い蒼空を背景に浮かび上がる灰褐色の山容はまさに城塞。この山を「大きな断層(崖)」と評するむきもあるようだが、地図を見ると納得。並びに並んだ岩崖！岩崖！！岩崖！！

その雄々しい容貌とは裏腹に、コイツは案外かわいそうなヤツかもしれない。どこかで聞いたような名だと思ったら、栃木に同じ名の山があった。だが向こうは良家のボンボンで身長は3倍以上。しかも彼女つき。山の世界にも「格差」はあるものなのだなあ、と同情してしまう。人間だったら同じ名ということで人からさんざん比べられてグレそう。筆者は断然こちらの味方だ。

本当にグレたワケではなかろうが、この山、エラくとんがっている。しかも体のあちこちに鎖をジャラジャラとぶら下げていて、なんとなく筆者が若い頃町を闊歩していたヤンキーを想起させた。

そのジャラジャラと金属音をたてる鎖をはっしと掴み、今回は鎖場を初体験。登山教室の山行に参加させてもらうようになってから、人生で初体験の連続だ。毎回実に濃ゆい時間を過ごさせてもらっている。岩にしがみついている間、終始腰あたりのムズムズ感が抜けなかったが…

良すぎる程の眺望の頂上でアイゼン装着の実習。帰り道は往路に比べてかなり緩やかではあるが、途中2ヶ所ほどアリの門渡りのような場所があるので油断できない。少なくとも夜はあまり通りたくない。それにしてもこの山、エラく尾根が薄い！！

大円地越ではツェルト展張の実習。前から欲しいと思っていたので、購入前に実物を見れるのは実にありがたい。まさか店舗に行ってパッケージから出して広げて見せて貰うわけにもいかない。でも、専用の収納袋にしまう際、きちんと折り畳まなくてもよいものなのだろうか？筆者などはレインスーツを収納する際にも、つつい衣料品店の展示棚にでも置くかのごとく畳んでしまう。それってムダ！？

大円地越は峠と呼ぶにはやけに深いV字谷のような場所だ。道には背の低い切り通しがある程度なので、正直「道屋」が萌えるような峠ではないが…それでも調べれば何がしかの感嘆できるような歴史はあるのかもしれない。なにせすぐ北側には「にほんの里百選」にも選ばれた関東の秘境「持方集落」があるのだから！！

いかん。「持方集落」を語りだしたりしたら、レポの主客が逆転してしまう。話を戻そう。

今回は鎖場の登攀にアイゼンの装着、ツェルトの展張と非常に内容の濃い山行実習だった。どれも山岳地帯を移動する際の様々なシチュエーションに対応する為には必須の技能だ。今後はぜひ自分で購入していじくりまわしてみたい。鎖場も数をこなして慣れたいものだ。先はとて長そうだが、一步一步着実に進んでいくしかなさそう。

# 実践山スキー・スノーシュー研修会

塩沢スキー場から箆山、八町林コース(1548m)

2月3日(日) 平子、伊藤(健)、渋谷、西、渡辺(恵)、山本、柏村、菅野、柳内、那須原、大和田、渡辺(敏) その他16名

指導委員会で例年実施している実践山スキー・スノーシュー研修会を今年度も実施した。石城山岳会からは12名の大人数が参加した。7時に水石トンネルを出発して8時過ぎに塩沢スキー場に到着した。天候は風のない絶好の登山日和であった。全体の参加者28名のうち15名がスノーシュー、13名がスキーで、それぞれ2班分かれて出発した。スキーコースの脇をたどりながら高度を上げていったが、次第に傾斜が急になり、それに斜面も硬くなって皆さん最後の詰めでは悪戦苦闘であった。スキー場最上部からはしばらく登りが続くが、次第になだらかになり、勢至平分岐まで緩やかな登りが続いた。最初はくろがね小屋でお昼にする予定であったが、勢至平分岐に着いたときは12時近くになった

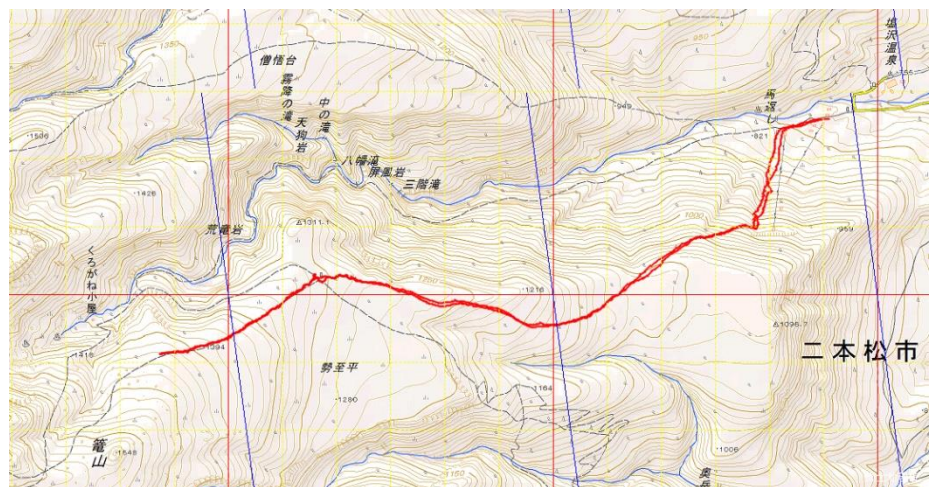


ので、くろがね小屋まではいかなくて、勢至平分岐で昼食とした。昼食後、班ごとの行動とし、スキー隊の一部は箆山の途中まで進み、その他のスキー隊とスノーシュー隊はそこから塩沢スキー場へ引き返すとした。コースでは樹林や灌木が切り払われているところもあるが、かなり密度の濃い藪が多くあったので、特にスキーで下る際に藪をよけるためのコントロールが大変であった。晴天に恵まれて満足のいく研修会であった。



塩沢スキー場 9:15→スキー場最上部 10:25→勢至平分岐 11:55~12:50→箆山直下最終点 13:15~13:27→勢至平分岐 13:35→スキー場最上部 14:19→塩沢スキー場 14:27

文責：渡辺敏夫



# 愛宕山・難台山・吾国山縦走

2019年2月2日(土) 太・菊池

インターネットで「JR常磐線とJR水戸線を使えば、茨城県の愛宕山・難台山・吾国山の縦走ができる」との記事を読み、実際に試してみた。

石城山岳会の登山教室では、田上農村集落センター付近を起点に「吾国山→愛宕山(駐車場)」縦走を実施したことがあるが、今回は、駐車場所確保と時間節約も兼ねて、愛宕山駐車場を起点に「愛宕山→吾国山」と縦走し、電車で戻って愛宕山を登り返した。もちろん、JR常磐線岩間駅を起点・終点に行動すればよいので、電車で行っても縦走ができる、非常に便利で貴重な縦走コースである。

現地登山道は十分に整備され、クサリ場、岩場などの危険箇所もなく、快適な縦走ができる。愛宕山・難台山・吾国山の各山の間には団子石峠と道祖神峠があり、それなりの距離とともにアップダウンがあり、進むにつれて太平洋、霞ヶ浦、関東平野、筑波山、富士山、加波山、日光那須連山など素晴らしい眺望が楽しめる。茨城百景とのことなので、興味を持たれた方は是非トライしてほしい。

なお、縦走当日は、晴天だったが、前日に降った雪が一部残り、北側斜面などでは落ち葉とともに多少難儀した。チェーンスパイクや軽アイゼンは持参していたが、ほとんど使わなかった。

## コースタイム

7:50 愛宕神社→8:10 カラス天狗モニュメント→8:20 愛宕山第二駐車場  
→8:30 ハイキングコース入口→8:45 見晴らしの丘→9:10 南山展望台→9:35 団子石峠  
→9:45 団子石→10:15 大福山→10:25 獅子ヶ鼻→10:30 屏風岩→10:50 難台山頂  
→11:30 すずらん群生地入口→12:10 道祖神峠→12:20 旧洗心館  
→12:25 林道出合い横断→12:50 吾国山→13:25 カタクリ群生地→13:45 林道出合い横断  
→13:55 吾国山登山道入口(耕作地出合い)→14:10 石鳥居(田上農村集落センター付近)  
→14:30 JR水戸線福原駅 14:52→15:08 JR常磐線友部駅(乗換え) 15:14  
→15:19 JR常磐線岩間駅→16:20 愛宕神社→16:30 愛宕山第二駐車場

(文責:太)



# 甚九郎山スノーシュートレッキング

甚九郎山（じんくろうやま） 1180.9m 三角点 福島県北塩原村

2019年2月17日

メンバー 石城山岳会 23名

2月17日の朝、少し雪は降っているが、天候は良くなりそうと。甚九郎山は、会津磐梯山の、西吾妻山の西側あり、檜原湖東岸の山。静かな山歩きを楽しめそうです。孤鷹森集落から、ペンションのわき、山に向かって歩き初めました。ほとんどの方がスノーシューを付けての歩行が初めての人が多く、まずは、駐車場わきで、スノーシューの付け方を習いました。思ったより、簡単にスノーシューを付けることが出来ました。歩いたことのない雪道を、スノーシューを付けて歩き、少しすると、急斜面がでてきました。スキューの板のように、横向きで斜面を上がろうとしましたが、なかなか上がれず、普通に前向きに歩いた方が、斜面を上がることが出来ました。女性人の多数参加者があり、最初の急斜面登りは、とても時間がかかりました。



先行者の足跡をたどりながら、なんとか尾根に乗ることが出来ました。

この日の雪は新雪で、スノーシューを付けての歩行は、快適で予定登頂よりかなり早く、着くことが出来ました。晴れば、木々の間から磐梯山の湖沼群が見えたが、今回は吹雪のために、その絶景を見ることは、できませんでした。

頂上に着くと、男性数名で、雪を手でかき、即席のテーブルとイスを作成してくれました。全員で、食事を楽しく取れました。

下山は、スノーシューの歩きかたもなれ、急斜面登りの時は、スノーシューの踵の金具をあげる、と習い、各自言われなくてもスノーシューの踵の金具を上げたり、下げたりしながら、下山することが出来ました。

皆様と楽しく、とても貴重な時間を過ごすことが出来ました。ありがとうございました。

（文責・佐藤幸子）

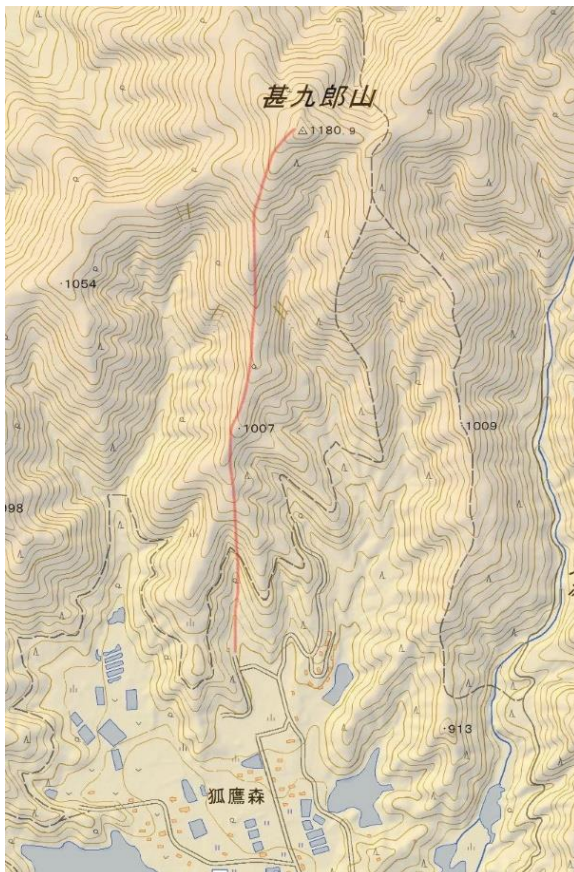
17日、夜明け前に出発、バスの中から日の出。楽しい1日になると思った。トンネルをぬけると、磐梯山も雪。冬なんだと。バスを降りて、各自冬装備タイム。先輩方のスノーシューをお借りした上に、付け方まで、1人1人、親切に指導してもらいました。ぎこちなく歩き初めて間もなく、厚着しすぎて、「暑い。喉が乾いた。」1枚脱いで、水分補給して、スッキリ。フードも無理してかぶらず、寒いくらいで、汗をかかない歩き方が、丁度良いと教えてもらおうと、襟元に風が入り、爽快感をあじわった。何でも無い所で転びながら、1歩1歩、いつかは、テッペン。真っ白な大地を。歩き方は、袴をするように、そろりそろり。「登りは、上げて、下りは、下げて。」と声をかけられても、何のことだか……踵の金具を上げると、ハイヒールを履いているように、歩けるらしい。山頂まで100mというところで、先頭を交代して、ラッセル経験。



山頂での集合写真

新雪は、ふっわとして、ズボットと足が入るから、重たい。予定よりも、1時間早く登頂ということで、もう少し先へ進む。雪を掘って、テーブルとイスを作ってもらい、ランチタイム。お湯は、暖をとるのに、絶対必要です。甚九郎山で、記念撮影して、スノーシュー組、スキー、スノーボー、みんなそれぞれ自由に下山。

どこかで誰かが転ぶと、みんな大笑い。楽しい大人の遠足となり、スノーシュー最高でした。会の皆さんのおかげで、無事に全員帰りのバスに乗れました。お世話になり、ありがとうございました。



(文責・蛭田ミチ)

- いわき合同庁舎出発 6:00 ⇒
- 裏磐梯ビジターセンター 8:00 ⇒
- 孤鷹森ペンション村登山口発 8:50 ⇒
- 甚九郎山頂 10:30 ⇒ 昼食 11:00 ⇒
- 孤鷹森ペンション村登山口着 13:00 ⇒
- 休暇村裏磐梯温泉入浴 13:20-14:10 ⇒
- 道の駅猪苗代 15:00 ⇒
- いわき合同庁舎着 16:30